「村上水軍」スペシャル対談

戦国時代、瀬戸内海を支配した〝大海賊〟がいた。それが村上水軍だ。武名は全国に轟き、織田信長方の水軍を負かしたこともあった。その海戦を壮大なスケールで描いた『村上海賊の娘』の著者・和田竜さんと村上水軍を先祖にもつ衆院議員・村上誠一郎さんが、大海賊の魅力を徹底解析した。

村上水軍の末裔

衆院議員 村上誠一郎

「信長を敵に回す水軍の覚悟がすごい」

村上 私は、三島村上家の能島の村上でして、伊予大島（愛媛県）の宮窪町の出身なんです。

和田 まさに（小説の舞台になった）宮窪ですか。

村上 私の実家からは能島が見えます。

和田 そうですか。村上さんご自身は、どこからのつながりなんですか。

村上 正確にはわからないんですよ。村上武吉の直系は山口に流されましたが、われわれは部下でしたから島に残ったんです。

和田 書状はありますか。

村上 残っていません。昔は刀剣もあったようですが、丁寧に保存しなかったので錆びてしまいました。水軍時代のいろんなものがあったと思われますが、わが家は4代政治家の家系で、選挙にすべて投入してしまいました。以前、村上公一さん（先代の能島村上家当主、故人）に聞いた話ですが、公一さんのお宅にも武具や金鎖があったらしいです。それが、2代前が全部放蕩に使ってしまったそうです。

和田 金鎖というと、大将が身に着けていた金で作った輪っかで、手柄を上げた兵にその場で渡すというものですね。

村上 海の戦いだから論功はその場で即決しないとわからない。死体は海の中だから首実検もできませんからね。

和田 ええ、小説か何かで読みました。

村上 それが、本家にすら今は金目のものは何も残っていない。村上一族は豪快だから先祖が全部使ってしまい、末裔は苦労してるんです（笑）。わが家に唯一残ってるのは「国難の際には親や兄弟の屍を乗り越えて戦え」という村上家の家訓ぐらいです。ところで、『村上海賊の娘』を書く一番強い動機はどこから出てきたんですか。

和田 村上水軍は小さいころから知っていて、かっこいいものだという認識が僕のなかにあったのが一番大きいかなあ。僕は大阪で生まれて3カ月で広島に引っ越してきました。

村上 私の伯父も父も旧制中学は広島なんですよ。（能島のある）愛媛は、広島と人的交流が盛んです。和田さんが広島出身というのは親近感を感じますね。

和田 昔は愛媛と広島は、今の感覚より海を通じてむしろ近かったですよね。子どもの頃、両親に連れられて中国、四国を旅行したんですけど、そのとき村上水軍について教えられました。そこからですね。和田家のなかでは、村上水軍はかっこいいものである、という共通認識がありました。

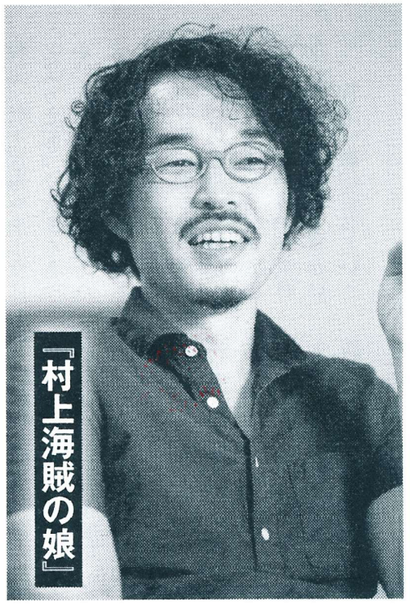
村上 村上水軍は、元寇の役、明の滅亡、日露戦争の日本海海戦の丁字型戦法と、世界史に何度も出てくる存在なんです。毛利元就が中国地方を制覇しようというときも、一日だけ兵を貸してくれと頼まれた。そういうことをみんなに知ってもらいたいんですよね。

軍書の村上水軍 規律厳しい集団

和田 村上水軍は広島では有名だし、みんな知ってるんだろうなと思ってたんだけど、関東ではそうでもないですね。歴史を知っている人は当然知っていますが。

村上 私も関東に出てきたら、「お前は海賊なのか！」って驚かれました。海賊というと赤フンドシで鬼みたいな顔っていうイメージを

むらかみ・せいいちろう　1952年、愛媛県生まれ。東京大学法学部卒。86年、衆議院初当選。大蔵政務次官、初代財務副大臣、国務大臣（行政改革・地域再生・構造改革特区担当）、内閣府特命担当大臣（規制改革・産業再生機構担当）などを歴任。現在、衆院政治倫理審査会会長、自由民主党総務。10期連続当選。



『村上海賊の娘』

作家 和田竜

「『信長公記』で木津川合戦を読み、深掘りしようと」

最強の海賊衆 村上水軍とは

和田竜氏の小説『村上海賊の娘』は、戦国時代に権勢を誇った海賊・村上水軍を描いた物語だ。

全盛期の村上水軍は、瀬戸内海の大半を支配し、海上を通行する船から帆別銭（ほべちせん＝通行料）を徴収したり、航行する船の警護や水先案内をしたりしていた。村上氏は、それぞれ拠点を置く能島（のしま）、来島（くるしま）、因島（いんのしま）の三家からなり、強い結びつきがあった。なかでも能島村上家の当主、村上武吉（たけよし、1533～1604）は、群雄割拠の時代にあって、どの大名にも臣従しなかったことで知られる。

『村上海賊の娘』は、武吉の娘、景（きょう、当時20歳）が主人公の物語。身長180センチ、細い顔に大きな目と鼻梁の鋭く高い鼻。今の時代でいう〝美人〟の顔だちだ。しかし、当時は彫りが浅く太り気味の女性が美しいとされていた時代。景は嫁のもらい手がない「悍婦（かんぷ）で醜女（しこめ）」と言われていた。海賊働きに明け暮れていたが、その戦いぶりや気っ風のよさが、海賊たちをはじめ、周囲の人々を魅了していく。

小説の舞台は、1576年の大坂（大阪）だ。天下統一をめざして西に勢力を広げたい織田信長は、一向宗の拠点・大坂本願寺と長い戦を繰り広げていた。信長は大軍を率いて本願寺を兵糧攻めにし、本願寺は毛利家に助けを求めた。毛利輝元はそれに応え、村上水軍を中心とする船団が結成され、兵糧を積んで大坂湾へ向かった。毛利軍は、信長の命で大坂湾を守っていた泉州侍たちと木津川（きづがわ）の河口で激突した。これが、のちに「第1次木津川口の戦い」とよばれる海戦だ。戦は、焙烙玉（ほうろくだま）という村上水軍に伝わる爆薬などを駆使した毛利軍が勝利。本願寺への兵糧入れを達成した。

村上水軍が活躍した海域の島々は、現在、広島県尾道市と愛媛県今治市をつなぐ「しまなみ海道」として整備されている。武吉が居城を築いた能島（写真）は、周囲約720メートルの小さな島で、現在は無人島だ。

わだ・りょう　1969年、大阪府生まれ、広島県育ち。早稲田大学政治経済学部卒。2007年『のぼうの城』で小説家デビュー、同作が第139回直木賞候補作となる。著書に『忍びの国』『小太郎の左腕』など。小説第4作となる近著『村上海賊の娘』で、14年本屋大賞を受賞。

されるけれど、村上水軍は規律の厳しい集団だったんです。右舷にいる人間が左舷にいただけで右腕を切り落とす。なぜかというと、海の戦いは自然との闘いだから、規律を守らなければ戦に勝てないからです。

和田　それは軍書で読みましたね。水夫が左右を勝手に移動したら船の動きがバラバラになっちゃうから。水夫が移動したらたたき切るとか、合言葉を忘れたらたたき切るとか。陸の合戦と違って、船を使った戦闘はちょっとした間違いが大きな戦術上のミスにつながっていくということかなと思いますね。

村上　村上水軍をテーマにしようと思った大きなきっかけみたいなものはあったんですか？

和田　『信長公記』（織田信長の一代記）ですね。あれを読んだら木津川合戦が出てきて、こういうことがあったのか、というのが具体的になった。村上水軍がいて、片方に織田信長という敵がいて、それで海戦がある。このネタはどう調べても面白くなる。だから深掘りしていこうとすぐに決めました。

村上　本願寺に食料を入れた木津川合戦、あのときが村上水軍の全盛だったと思うんですよね。

和田　一番輝いてますね。だから書いたんです。

主人公イメージ 長谷川潤さん

村上　『信長公記』を読んで思いましたが、信長はさぞ悔しがったろうなと。本願寺に食料を運んだっていうのは、一族としても誇らしいわけですよ。あの織田信長を向こうに回すというのは命が吹っ飛ぶ覚悟。それを恐れないっていうね。

和田　ロマンチックですよね。

村上　武吉は織田信長や豊臣秀吉という絶対権力者に対して最後の最後まで抵抗する。村上水軍は時代を先取りしていく進取の気風です。時の権力者であっても正しくないことは許さない。政治家が憲法違反の法律を通すことはやってはならないと、集団的自衛権に最後まで反対したのも、村上水軍のDNAかなと思います。

和田　私は村上家のご当主の方々にもお会いしましたが、家臣の人のほうが元気なのかとも思います（笑）。

村上　主人公の景のアイデアは斬新ですよね、奔放で大柄で日本人離れした風貌。どういうイメージから出てきたんですかね。

和田　戦国時代の女性って政略結婚でおしとやか、というのも一方でありながら、やっぱり史料を読んでいると元気なんですよね。

村上　景ちゃんのような子が村上一族にいたら私がもらいたいぐらい（笑）。

和田　景は、家系図には「女」とあるだけで、あとは僕の想像なんです。『萩藩譜録』という史料に書かれているのは、村上武吉に娘がいて、後に黒川五右衛門元康という男と結婚した、ということぐらい。でも、あの海賊王の武吉に実の娘がいた。これは書ける、と思ったんですよ。

村上　景は和田さんの理想の女性でしょ？

和田　うーん、まあ、わりと元気な女性は好きですね（笑）。

村上　まあ、あの時代の村上一族だったから、あのような素晴らしい女性がいたんですね。

和田　そういう説得力を持たせられたらいいなと思いながら書きましたね。インターネットで作品の感想を読んでいたら、今治の人が「うちのばあちゃんも景みたいな風貌だった」とか書いてあるんですよ。いいことを書くと「そのとおりである」って言う人も結構出てくるんだなと思いました。

村上　具体的に誰かをイメージして書いたんですか。

和田　特定の人を想定したわけではありませんね。

村上　映画だったらこういう女優さんにしようかな、とかはなかったんですか。

和田　あんまりイメージしちゃうと、その枠にはまって広がりがなくなっちゃうんですよね。ただ、読んだ人からは、「女優の杏さんをイメージして書いたんですか」とよく聞かれました。

村上　私のイメージとしては、すみれさんかなと思うんですよね。

和田　なるほど。なんとなく外国人のような雰囲気にはしたかったんです。最初、景の設定を編集者に話してもわかってもらえなかったんで、そのとき例えたのが長谷川潤さんというタレントさんで……。

村上　ハセジュンのこと？

和田　そうそう（笑）。ああいう感じです、と言ったら、編集者も理解してくれました。

村上　ところで、景を見てふっと思い出したのが、お恥ずかしながら、私の娘なんですよ。

和田　おきれいな方で。

村上　いやいや。娘は大学を卒業して広告会社に入ったんですが、NHKドラマの「梅ちゃん先生」を見て「リセットしたい」って言いだして、文科系なのに医学部に入り直しました。2度も大学に行くから親としては大変なんです。

和田　優秀なんだなあ。

村上　いえいえ。親父に相談しないで勝手にやる。これも村上水軍の血なのかなあと。独立不羈の精神というか。和田さん、取材ではどこに滞在されたんですか？

和田　滞在というと、松山に1週間ぐらい。「ふなや」に泊まって原稿を書いていました。夏目漱石が逗留した旅館だというので、文豪にあやかって。しまなみ海道には何度も取材に行きましたね。能島、来島、大三島などを巡りましたが、やっぱり能島が印象に残っています。僕が行ったときは発掘調査をしていて上陸できなくって。今は上陸できますよね。

村上　能島は桜の名所なんで、春は船が出るんですよ。ただ、桜がないと人が来ないから、船をチャーターしないと行けないんですよ。

和田　潮流クルーズにも乗りました。

村上　あれは流れが速いんですよね。能島に居城を設けられたのも、あの潮流を操れるのが村上水軍しかいないからです。

和田　最近、発掘調査が進んで、能島にも居住空間があって、人が住んでたんじゃないかって話になっていますね。

国宝の武具が今も島に残る

村上　それはよほど偉い人ですよね。われわれ部下たちは、対岸の宮窪とか伯方に住んでいて「いざ鎌倉」で能島に集まるんです。

和田　水が出ないから、能島は人が住まない出城だったのだろうという見方もあったんですよ。それがここ1年ぐらい、柱の跡とか食器類が出てきたりして、どうやら人が住んでたらしいと。また夢が広がるなあと思います。

村上　私が幼い頃、島へ渡るというのは大変なことだったんですよ。両親が結婚した頃は手漕ぎ船でした。昭和40年代に初めてフェリーができましたが、今治から尾道に行くだけでも半日かかったんです。

和田　僕はちょうどそのころ両親に連れていかれてたんでしょうね。子どもだから覚えていないけれど。

村上　島も今はだんだん過疎になってきています。

和田　もっと賑やかになってくれるとうれしいですね。今あるものを有効活用して人を呼び込む、注目を集めることもできると思うんですよね。景色や地形も面白いところですし。

村上　大三島の大山祇神社には、すごいものがたくさんありますよ。

和田　そうそう。僕も行きました。国宝がごろごろあって、義経から奉納されたものとか、頼朝から奉納されたものとか。

村上　なぎなたや弁慶が持つような刀剣も置いてあるんです。和田さんの作品にも出てきますが、瀬戸内のジャンヌ・ダルクとも呼ばれた鶴姫の鎧もあります。

和田　鶴姫というのは、僕は正直、創作だと思ってるんですよね。なので小説の中では幻だ、という書き方をしました。ただ一方であれだけの観光資源なので、大事にしないといけないと思います。

村上　ひとつ和田さんにお願いがあります。実は司馬遼太郎さんは、四国の各県を舞台に小説を書いてくれたんですよ。高知は『功名が辻』と『竜馬がゆく』、愛媛は『坂の上の雲』、香川は『空海の風景』、徳島は『菜の花の沖』。

和田　たしかにそう言われてみるとそうですね。気づきませんでした。

村上　村上水軍は和田さんのおかげで復権してきました。今度は四国の本を書いて地元を盛り上げてください。もし「ふなや」に泊まるなら、私がご招待しますから。

和田　いいネタがあれば書きますし、泊まるなら自分で払いますよ（笑）。

構成　本誌・鈴木　顕

写真・植田真紗美（写真部）